

法進の仏教観

西 野 健

1. はじめに

北涼 (397-439) 時代の僧・法進 (?-444)¹⁾ は、トルファン (現・新疆ウイグル自治区) で飢えた人々のために命を絶っている。小稿は、彼の行為、いわゆる捨身に注目し、彼の出身地である北涼仏教との関係を考察する。

2. 北涼時代の仏教

北涼は五胡十六国時代 (304-439) の末、後涼 (386-403) から自立した段業 (?-401/397-401 位) が樹立した胡族 (匈奴系) の国家である。北涼仏教の発展は、のちに北涼王となった沮渠蒙遜 (368-433 / 401-433 位) の奉仏に依るところが大きい。

(参考 1) 北涼時代の主な翻訳經典と訳経僧 『歴代三寶記』『開元釋經錄』など参照				
訳経僧 (生没年)	[出身地]	翻訳目的	翻訳年代	經 典 名
①道龔 (生没年不詳)	[出身地不詳]	沮渠氏のため	永安年中 (401-411)	『寶梁經』(二卷)
②法衆 (生没年不詳)	[高昌]			『大方等陀羅尼經』(四卷)
③僧伽陀 (生没年不詳)	[西域人]			『慧上菩薩問大善權經』 (二卷)
④曇無讖 (385-433)	[中インド]		玄始 3 年～15 年 (414-426)	『大般涅槃經』(四十卷) 『金光明經』(四卷) 『大方等大集經』(三十卷) など
⑤沮渠京声 (?-455 以降)	[沮渠蒙遜 従弟・居士]	特定でき ず	永和中 (433-439)	『禪法要解』(二卷) 『觀弥勒菩薩上生兜率天 經』など (注 1)

⑥浮陀跋摩 (?-439 以降)	[西域人]	沮渠牧虔 のため	永和 5 年 (437 年) 4 月 8 日 ～永和 7 年 (439 年) 7 月	『阿毘曇毘婆沙論』(六十 卷) 道泰が筆受. 慧嵩・道朗 ら 300 人以上動員.
⑦智猛 (?-453?)	[京兆新豊人]		永和年中 (433-439)	『般洹經』(二十卷)
⑧道泰 (生没年不 詳)	[出身地不詳]	特定でき ず	永和 5 年 (437 年) 以降	『大丈夫論』(二卷) 『入大乘論』(二卷)
⑨法盛 (生没年不 詳)	[高昌]		(翻訳年代不明)	『菩薩投身餓餓虎起塔因 緣經』(一卷)
(注 1) 中国 (宋) で孝建 2 年 (455) 訳出. 彼は若い頃高昌で (観世音と弥勒經) の二經 典 (観世音經は現存せず) を得ているが, 涼州に帰還後すぐ訳出したか不明.				

沮渠蒙遜・牧虔 (?-447 / 433-439 位) 親子のために翻訳されたことがわかる²⁾. 法進の名はみられないが, 彼が蒙遜に厚遇されていたことや³⁾, 『阿毘曇毘婆沙論』の翻訳に参加した道朗が法進の弟子の一人⁴⁾であったことは興味深い.

(参考 2) 北涼時代のおもな石塔 (形状と刻銘)				
形	a. 頂 部 (最上部)	傘 蓋	b. 身 部	八面に仏龕を設け 7 体の如来像 (過去仏) と 1 体の菩薩坐座 (未来の仏陀弥勒)
	c. 円 柱 部 分	『十二因縁經』経文が刻文		
状	d. 八角柱状 (最下層)	8 体の供養天 (八封符 号や家族の構成員) 線刻	八卦符号…占いに用いる八種の卦・森 羅万象を象徴, 吉凶禍福を占う 家族構成員…父・長男・中男・少男・母 ・長女・中女・少女や供養者の人名	
	石 塔 名	年 月 日	発 願 文	
刻 銘	①酒泉馬德恵塔	承陽 2 年 (426 年) 10 月 5 日	「…馬德恵於酒泉爲父母恩…」	
	②敦煌口吉德塔	承陽 2 年 (426 年)	「…福願與七世父母, 兄弟親宗及一切衆 生共成無量道. …」	
	③酒泉高善穆塔	承玄元年 (428 年) 4 月 14 日	「…高善穆爲父母報恩, □立釈迦文尼得 道塔, …各爲十種父母報恩歡喜…」	
	④酒泉田弘塔	承玄 2 年 (429 年) 2 月 28 日	「…爲父母君主報恩此塔…」	
	⑤酒泉白雙塔	縁禾 3 年 (434 年) 7 月	「…生値末法, 願此福報, 使国主兄弟善 純熟, 典祚三寶, 現在師僧證菩提果, 七 世父母兄弟宗親捨身値遇弥勒, 心門意解 獲斯果願.」	

⑥酒泉程段兒	太祿 2 年（436 年） 6 月	「…自竭爲父母合家立石塔形象。願以此 福成無上道。並及命過。…」
--------	----------------------	-------------------------------------

北涼時代の仏教信仰と造像の状況を知る上で重視される⁵⁾。中でも⑤酒泉白雙塔〔祿禾 3 年（434 年）7 月〕の発願文は、法進とトルファンにおける捨身行為との関係を確認するものでないが、弥勒信仰の一端をうかがわせる資料として注目できる。

⑤酒泉白雙塔〔祿禾 3 年（434 年）7 月〕の発願文（下線部は拙者）

「…生値末法。願此福報。使国主兄弟善純熟。典祚三寶。現在師僧證菩提果。七世父母兄弟宗親捨身值遇弥勒。心門意解獲斯果願。」

3. 法進の最期

北魏（386-534）・太武帝（408-452 / 424-452 位）の侵攻（439 年）で北涼は滅亡する。北涼王族らは西へ逃れた（法進も共にしている）。その後、蒙遜の子息・沮渠無緯（?-444 / 442-444 位）を王とする沮渠氏高昌国（442-460）を樹立させた⁶⁾。

「…後三年景暉卒。弟安周統立。是歲飢荒死者無限。周既事進。進屢從求乞以賑貧餓。國蕃稱竭。進不復求。迺淨洗浴取刀鹽。至深窮屈餓人所聚之處。次第授以三歸。便掛衣鉢著樹。投身餓者前云。施汝共食。衆雖飢困猶義不忍受。進即自割肉和鹽以啖之。兩股肉盡心悶不能自割。因語餓人云。汝取我肉猶足數日。若王使來必當將去。但取藏之。餓者悲悼無能取者。…」⁷⁾（下線部は拙者）

法進の最期は、沮渠安周（?-460 / 444-460 位）即位の年に発生した飢饉を発端としている。法進が国庫の尽きた時点で、安周に救済要請を求めず自分の身体を清め刀を用意したことは、彼の決意の固さを伝えている。

「…須臾弟子來至。王人復看。舉國奔赴號叫相屬。因輿之還宮。周勅三百斛麥以施餓者。別發倉廩以賑貧民。至晨乃絕。出城北闌維之。烟炎衝。天七日乃歇屍骸都盡唯舌不爛。即於其處起三層。樹碑于右。…」⁸⁾

法進の行為は人々に衝撃を与えたことがわかる。『高僧伝』は安周の救済措置をはじめ、亡くなった法進の荼毘、その後の三層（石塔?）・樹・碑（法進追善の碑文?）の建立を伝えている。

4. 結びに

1. トルファンでの出来事の実偽性 現在『高僧伝』以外に伝えられている史料がなく実証する手段がない。ただし『高僧伝』の詳細な記述から、(1) トルファ

ンで何か危機的な状況が起こり多くの住人が命を落としたこと。(2) こうした状況に対し、北涼仏教を究め北涼王族に厚遇されていた法進が、高昌国と住人のため何らかの手段を用いて命を絶ったこと。以上の点は確証できる。なお沮渠氏高昌国は、高昌王・安周のもと⁹⁾ 約 15 年間存続している。

2. 法進の仏教 法進は北涼・高昌国の両王族(沮渠氏)に厚遇されており、仏教指導者としてだけでなく、君主の政治顧問的な役割¹⁰⁾ も果たしたことから、(1) 君主や国家のために仏教の研究。(2) 君主や国家の危機に対する責任感。これらの点から、自らの仏教観として最上の布施・「捨身」行為を実行したと考えられる。

-
- 1) 法進について『高僧伝』巻第二曇無讖伝 (T.T 50) 「…初在姑蔵。有張液沙門道進。…」(p336.c.L19) 『高僧伝』巻第十二法進伝 (T.T 50) 「釋法進。或曰道進。或曰法迎。姓唐。涼州張液人。…」(p404.a.L29-b.L2) 『高僧伝』巻第二曇無讖伝 (T.T 50) 「…欲從讖受菩薩戒。…進即於定中見釈迦文與諸大士授己戒法。其夕同止十餘人。…次第於佛前爲說戒相。…」(p336.c.L20-27) 以下の論文を参照 船山徹「南朝の菩薩戒思想」『東方学報』(京都) (1995)・山部能宜「『梵網經』における好相行の研究—特に禪觀經典との関連性に着目して—」『北朝隋唐中国仏教思想史』(2000) 2) 北涼時代の仏教に関する主な論文 小田義久「沮渠氏と仏教」『龍谷史壇 60』(1968)・佐藤心岳「涼州の仏教—とくに仏教の伝播の実情を中心として—」『印仏研第 28 巻 2 号』(1980)・田村実造『中国史上の民族移動期—五胡・北魏時代の政治と社会—』(1985)・池田温「高昌三碑略」『三上次男博士喜寿記念論文集 歴史編』(1985)・佐藤智水『北魏仏教史論考』(1998) 杜斗城『敦煌叢刊二集 10 北涼佛教研究』(1998) 3) 『高僧伝』巻第二曇無讖伝 (T.T 50) 「…爲沮渠蒙遜所重。…」(p404.b.L1-2) 4) 『高僧伝』巻第十道朗伝 (T.T50) 「…釋道朗。高昌人。…朗師釋法進亦高行沙門。…」(p392.c.L8-9) 『高僧伝』巻第十二法進伝 (T.T50) 「……進弟子僧遵。姓趙。高昌人。善十誦律蔬食節行。誦法華勝鬘金剛般若。又篤厲人。常懺悔爲業。」(p404.b.L17-21) 5) 殷光明「北涼石塔造研究」『法蔵文庫中国仏教学術論典 81』(2003) 参照 6) 『高僧伝』巻第十二法進伝 (T.T50) 「…遜卒子景環爲胡寇所破。問進曰。今欲轉略高昌爲可克不。進曰必捷。但憂災饑耳。廻軍即定。」(p404.b.L2-4) 法進は景環(無緯)に高昌攻略の成功と飢饉の発生を予見している。 7) 『高僧伝』巻第十二法進伝 (T.T50) (p404.b.L4-12) 8) 『高僧伝』巻第十二法進伝 (T.T50) (p404.b.L12-17) 9) 池田前掲論文参照 10) .3).6) を参照

〈キーワード〉 法進, 北涼仏教, 沮渠氏高昌国

(龍谷大学仏教文化研究所客員研究員)

the *Ratnakūṭa*, 108 dreams indicating progress in spiritual practice. They are annotated with exceptionally long interlinear commentaries. Among them, two dreams of the *Svap* seem to be missing, while two unknown ones are apparently added.

Comparing the citation with the *Svap* itself, this article describes the characteristics of the interlinear commentaries and the text corruptions of the *SMG*, which are often difficult to ascertain because the text is only available in a single edition.

The *Svap* first enumerates 108 dreams and later explains them in detail. The *SMG* quotes the enumeration part, while the interlinear commentaries explain the dreams by quoting the explanation part of the *Svap*. But since the two added dreams of the *SMG* are separately found in the explanation part of the *Svap* together with two other dreams, they may be considered to have originally belonged to the interlinear commentaries.

The interlinear commentaries are often so simplified that it is difficult to understand them without their sources. The sources, however, remain unknown for most other parts of the Gradualist chapter. Further research is, therefore, required.

197. Fajin's Idea of Buddhism

Takeshi NISHINO

Fajin 法進 (?-444) [a monk in the Northern Liang 北涼 (397-439)] took his life for the sake of starvelings in Turfan. This study is an investigation of the relationship between Fajin's action known as *ātmabhāva-parityāga* 捨身 and the Buddhism of the Northern Liang. By the way, this Buddhism developed through King Meng Xun's 蒙遜 (368-433/r. 401-433) devotion to Buddhism. In his reign, Fajin was given a warm reception by the king.

When the Northern Wei 北魏 (386-584) overpowered the Northern Liang in 439, the Northern Liang royal family led a retreat of some families to the west. Fajin was included, too. In 442 Wu Hui 無緯 (?-444/r. 443-444) occupied Turfan and established in the following year the Qoco 高昌 kingdom

ruled by the Juqu 沮渠 family (442-460).

198. On the Interpretation of PV III 338-340 by mKhas grub rje

Atsuki MURAKAMI

This paper aims at studying the interpretation of PV III 338-340 by mKhas grub rje. He interprets these three verses as those which establish *gzhan rig* (other-cognition) of Yogācāra. On the other hand, he has raised an objection to Tibetans who consider PV III 338 as presenting Sautrāntika theory, and considers PV III 339-340 to present Yogācāra theory. Such an interpretation can be traced to bLa ma dam pa bsod nams rgyal mtshan's PV commentary. Focusing on the difference of between both opinions, we examine why mKhas grub rje needed to understand these three verses as such. Most particularly, do these two commentators take PV III 338 as presenting Sautrāntika theory or Yogācāra theory?

199. *Rang gi mtshan nyid kyis grub pa* again

Yōichi FUKUDA

Rang gi mtshan nyid kyis grub pa is one of the key concepts of Tsong kha pa's Madhyamika philosophy, and Dr. Yoshimizu translates it as pertaining to what is "intrinsically real." In this paper, I investigate this concept in Tsong kha pa's interpretation of Yogācāra philosophy. In my opinion, *mtshan nyid* refers to the reason or cause of the characters, postulated on the basis of mundane words or concepts, and *kyis* means "by the power of" (*kyi dbang gis* as paraphrased by Tsong kha pa himself). This concept reflects the *mtshan mtshon gzhi gsum* relationship unique to Tibetan Buddhist literature. In this relationship, *mtshan nyid* means the reason for the predicate *mtshon bya* to the subject *mtshan gzhi*. If one takes this reason *mtshan nyid* as the real existent character of the postulated predicate *mtshon bya*, then that person can grasp the concept of *rang gi mtshan nyid kyis grub pa*.